

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730410

研究課題名（和文） 組織における物理的環境が身体・感情に与える影響についての社会学的研究

研究課題名（英文） A Sociological Approach to the Bodies and Emotions on the Physical Settings in Organizations

研究代表者

竹中 克久（TAKENAKA KATSUHISA）

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任講師

研究者番号：50434907

研究成果の概要（和文）： 「組織における物理的環境が身体・感情に与える影響についての社会学的研究」においては、従来の組織研究ではそれほど重要視されてこなかった物理的環境（アーティファクト、空間、風景など）に着目し、「洗脳装置としての組織／情報弱者としての人間」モデルを構築した。その結果、刑務所、病院、学校、企業といった組織を比較することが可能となった。

研究成果の概要（英文）： In “the sociological study on influence that the physical environment in the organization gave in a body, feelings ,” I paid my attention to physical environments (artifact, space, scenery) that had not been regarded as important in the conventional organization study so and built a theoretical model of “organization as psychic prison / human as information illiterate.” As a result, I became able to compare a prison, a hospital, a school, the organization such as the company regardless of profit, non-profit.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：組織・社会学・組織美学・身体・感情・組織文化・雰囲気

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 研究の背景

組織研究 (organization studies) において、以前より社会学的アプローチの有効性は重視されながらも、日本の学界においてはその存在感が希薄であったことは否めない。それは、社会学的な組織論がヨーロッパを中心とした最新の研究動向である組織美学 (organization aesthetics) などの知見をフ

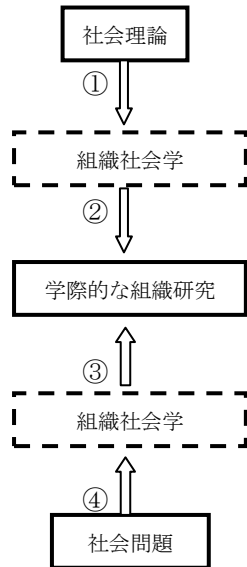
ォローできていないことに一つの要因があった。

それによってもたらされたのが、組織社会学の長年にわたる「停滞」状況であった。1995年以前までは、国内の組織研究で社会学的アプローチは今田高俊（今田、1986）や佐藤俊樹（佐藤、1993）らによって、「更新」されていたが、その後約 20 年にわたって、独自のパースペクティブの有効性を示すことが

できない状況が続いていたことは否めない。

## (2) 日本の組織社会学の現状

研究開始当初の組織社会学の状況は次の図のように描くことが出来る。



【日本の組織社会学の現状】

日本の組織社会学の発展と挫折は、社会学の「更新」に依存している (①)。すなわち、新たなパラダイムに基づいた理論の発展と挫折が、そのまま 10-20 年のタイムラグの後に「輸入」されているのみであり、組織社会学という学問の可能性は常に脆弱なものでもある。なお、組織社会学は学際的な組織研究に影響を与える存在であるものの、現在の日本ではその存在感は極めて薄く、「停滞」していた (②)。

また、社会学は実践の科学という経営学を中心とした組織研究に対して懐疑的で批判的なスタンスが求められたり、経営理論の実践の現場において問題が発生していないかどうか監視する機能が求められたりする (③)。それは、フィールドワークやアンケート、インタビュー調査等から得られた知見から「社会問題」の発見に依存している (④)。しかし、このプロセスにおいても、組織社会学はその媒介項としての機能を果たせてはいない。そのため、本来ならば組織の問題として体系化されるべき事象が、個別の問題としてのみ取り扱われているという現状がある。すなわち、組織社会学は二重の意味で、その存在感と可能性を示していかなければならない状況下にあった。この状況を打破するためには、ミクロ社会学、マクロ社会学の発展にあわせてかたちでメゾレベルの組織社会学の復権が求められていた。

- 今田高俊、1986、『自己組織性——社会

理論の復活』創文社

- 佐藤俊樹、1993、『近代・組織・資本主義』ミネルヴァ書房

## 2. 研究の目的

### (1) 研究目的

上記の問題意識に基づき、日本の組織社会学の刷新を目的として、組織の理論構築を行った。

その際に、必要不可欠な作業として、アーティファクトや空間、風景、音景といった「現にそこに圧倒的な存在感を示しながらも従来の組織社会学が軽視してきた対象を組み込んだ組織理論の構築を目指した。これらの概念は社会学一般の議論ではその重要性が指摘されているものの、組織社会学ではそれほど着目されるものではなかった。しかし、組織における人間の身体や感情について考察する際には、決して軽視できないものであることは自明であり、それらを適切に扱う理論構築が求められた。

### (2) 組織の捉え方

そこで、本研究においては、組織はいかのように定義された。まず(1)組織とは、当事者によって (科学者という当事者も含む) 可感できる対象であること、次に(2)コミュニケーションを要素として成立し、それはコミュニケーションが不断のプロセスであることと相俟って、組織というものもダイナミックなプロセスであるということ、そして、(3)そのコミュニケーションによって、当事者同士の協働が可能になり、ならびに協働を強いられる (トップも含む) 存在であること。(4)最後に、再び舞い戻って、そのコミュニケーションというものが組織という文脈で当事者によって理解=解釈され、可感されているということ、である。

すなわち、組織とはきわめて特殊な社会的・物理的時空間である。それはコミュニケーションが危くなる時点で、当事者同士に還元され得ない特殊な目的、戦略、構造、文化といったものをシンボリック・メディアとして生じさせて成立する舞台である。そのため、各当事者の努力の総体より多くの成果を生み出すこともあれば、自由や主観性を放棄させることで大いなる束縛をももたらすものであるとの知見にたち、組織社会学の刷新を試みた。

## 3. 研究の方法

### (1) 海外における最新の研究動向

主として、イタリアやデンマークの組織研究をフォローし (Gagliardi 1990, Strati 1999, Hatch and Cunliffe 2006)、組織においてそれほど重視されてこなかった物理的環境 (アーティファクト) や雰囲気に着目し、

それが組織内の人間の身体や感情にどのような影響を与えているのかを明らかにした。

#### (2) 研究の独創性

アーティファクトについては、組織文化研究の中でエドガー・H・シャイン (Schein 1985) によってその存在は指摘されていたものの、それについて理論が精緻化されることはなかった。本研究では、組織美学を取り入れることによって、シンボル化される前のアーティファクトについて言及できる理論構築を行った。病院組織の硬質的なリノリウムを歩く医師の足音や、工場の中に響き渡る重金属的なサイレン音などは、それらがシンボルとして組織成員に認識される以前から、その組織の雰囲気構成するアーティファクトになっている。そこでは、患者や従業員は自発的に権威を受け入れるほか、舞台としての組織において、自らの役割を強化しながら再生産される。その意味においては、この組織という舞台は、ある種の洗脳装置としても機能する可能性がある。人びとは、特殊な時空間である組織に置かれたとき、その情報格差を意識的にせよ無意識的にせよ「味わう」。それによって、進んで「情報弱者」になり得ることすらある。例えば、博物館などが典型的であるが、各種の情報を順路という「ストーリー」に従って動くうちに、意識的であれ自発的であれ、人間は「情報弱者」となるのである。

#### (3) 新たな理論モデル

コミュニケーションから成立した舞台としての組織は、一方で洗脳装置としても働き、他方では情報弱者を生産する。

この見地から、本研究ではさらに「洗脳装置としての組織／情報弱者としての人間」という「組織／人間」の新たなモデルを提示し、その有効性を検証した。

- Gagliardi, P. ed., 1990, *Symbols and Artifacts: Views of the Corporate Landscape*, Berlin and New York: Walter de Gruyter.
- Hatch, M. J. and Cunliffe A. L., 2006, *Organization Theory: Modern, Symbolic, and Postmodern Perspective, second edition*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Schein, E. H., [1985] 2011, *Organizational Culture and Leadership*, 4th ed., San Francisco: Jossey-Bass Inc. (=2012, 梅津祐良・横山哲夫訳『組織文化とリーダーシップ』白桃書房.)
- Strati, A., *Organization and Aesthetics*, London: SAGE publications, 1999.

#### 4. 研究成果

#### (1) 総括

人間は組織という特殊な時空間に置かれたときに、自発的に権威に服従することが明らかにされた。「情報弱者としての人間／洗脳装置としての組織」という新たな人間と組織のモデルを構築したことによって、今後、病院や学校をはじめ企業組織にも適用可能な理論枠組みとなった。これにより、国内の組織研究のなかで組織社会学のプレゼンスを高めることが可能となった。

#### (2) 研究成果の国内発信

また、明治大学人文科学研究所叢書として、本研究の成果が含まれた書籍を刊行した (図書①)。この成果に対しては、社会学だけでなく、経済学、経営学などをディシプリンとする専門家から有益なコメントを多数届けられ、組織研究を活性化させる一因となったと推察される。

また、分担執筆した論考が含まれた図書は、日本コミュニケーション学会奨励賞 (教科書・啓蒙書の部) を受賞したことから、本研究は高いレベルにあることが証明された (図書②)。

#### (3) 研究成果の海外発信

海外においては、2010年度に世界で最も権威ある社会学会である International Sociological Association の RC08 セッションにおいて、ピア・レビューを経た後に研究成果を公開する機会を得た (学会発表③)。本報告においては、日本の企業組織にて行われる「社葬」や「入社式」といった儀礼行為が、組織の秩序維持と競争意識の向上というともすれば相反する側面を説明するものとして提示した。フロアからは多数のコメントがあったことから、日本の組織社会学のプレゼンスを示すことが出来たと考えられる。

#### (4) 今後の課題

今後の課題として残されたのは、「洗脳装置としての組織／情報弱者としての人間」モデルのさらなる精緻化作業があげられる。そのほか、組織の社会学という、組織を研究対象とした理論のみでは日本の組織社会学の可能性の反面でしかない。組織から人間と社会を説明できる「組織からの社会学」を理論構築する必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計2件)

- ① 竹中克久、「組織の使命と企業博物館—原子力発電展示が生み出す情報弱者」、『情報コミュニケーション学研究』、査

読無、12号、2012、1—12

- ② 竹中克久、「組織が生み出す社会——刑務所、病院、学校、企業の比較から」、『情報コミュニケーション学研究』、査読無、10・11合併号、2011、pp. 63—76

〔学会発表〕（計3件）

- ① 竹中克久、「組織社会学の可能性——アーティファクト・空間・風景」、経営学史学会主催現代経営学研究会、箱根（文部科学省共済組合箱根強羅荘）、2012.12.26.
- ② 竹中克久、「組織の比較分析の可能性——刑務所、病院、学校、企業」、日本社会学会、名古屋大学、2010.11.6.
- ③ Takenaka, Katsuhisa, “The Concept of Organizational Culture and Sociology of Organization in Japan,” XVII World Congress of International Sociological Association, SVENSKA MÅSSAN—the Swedish Exhibition & Congress Centre, Göteborg, Sweden, 16, July, 2010.

〔図書〕（計2件）

- ① 竹中克久、『組織の理論社会学——コミュニケーション・社会・人間』（明治大学人文科学研究所叢書）、文眞堂、2013、282
- ② 竹中克久、「組織とコミュニケーション——我々は何を共有しているのか」、鈴木健人・塚原康博、鈴木健編、『問題解決のコミュニケーション——学際的アプローチ』、白桃書房、2012、pp.87—106

〔その他〕

ホームページ等

Read & Researchmap

<http://researchmap.jp/take-katsu/>

明治大学教員データベース

<http://rwd2.mind.meiji.ac.jp/Profiles/27/0002691/theses.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹中 克久 (TAKENAKA KATSUHISA)

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任講師

研究者番号：50434907